氏　名（本籍）	鈴（すず）　鴨（かも）　よ し み
学 位 の 種 類	博　　士（障害科学）
学 位 記 番 号	医　博（障）第　9　号
学位授与年月日	平 成 11 年 3 月 25 日
学位授与の条件	学位規則第 4 条第 1 項該当
研 究 科 専 攻	東北大学大学院医学系研究科 （博士課程）障害科学専攻
学 位 論 文 題 目	視覚障害者の心理的適応が社会統合に与える影響について －職業訓練中の視覚障害者の場合－

（主　査）

論文審査委員　教授　大　森　浩　明　　教授　岩　谷　　力

教授　玉　井　　信

論　文　内　容　要　旨

研　究　目　的

1）障害への適応に関する心理的変数が障害受容とどのように関連するのかを探り，日本における視覚障害者の心理的適応の構造モデルを構築する。

2）障害受容を含めた心理的適応が社会への再統合に影響を与えるだろうという仮説を検証する。

方法および結果：

【研究1　視覚障害者用心理的適応尺度の作成】

翻訳・逆翻訳・専門家や視覚障害者による検討等を経て，視覚障害者の心理的適応を測定するNottingham Adjustment Scaleの日本語版（NAS-J）を作成し，晴眼者を対象にした予備調査を実施した。因子分析により，自尊感情（5項目），視覚障害者に対する態度（5項目），不安・うつ（6項目），帰属スタイル（6項目），自己効力感（4項目），ローカスオブコントロール（3項目）の6因子29項目が選定された。各下位尺度ごとの信頼性係数は，十分な内的整合性を示した。健康関連QOL指標であるSF-36との外的基準妥当性も示され，NAS-Jが上記6つの心理的変数を測定するための適切な尺度であることが示された。

【研究2　視覚障害者を対象としたNAS-JおよびSF-36の妥当性及び信頼性の検討】

研究1で整理された29項目に「障害の受容」9項目を加えた38項目のNAS-Jと健康関連QOL尺度SF-36が，全国5カ所の視覚障害者リハビリテーション関連施設に入所する職業訓練者336名を対象にして施行された。

NAS-Jは，まず因子分析によって，不安・うつ（6項目），自己効力感（4項目），帰属スタイル（5項目），自尊感情（4項目），障害の受容（5項目），障害者への態度（4項目），ローカスオブコントロール（3項目）の7因子31項目が選定された。「不安・うつ」「自尊感情」「態度」「ローカスオブコントロール」の下位尺度得点において視覚障害者は晴眼者に比べて有意に低い得点であった。各下位尺度の信頼性係数は十分な内的整合性を示した。各項目間の相関は先行研究と同様の傾向を示した。これらのことより，NAS-Jは視覚障害者の心理的適応を測定するのに十分な妥当性と信頼性を持つと判断した。

SF-36は，すべての下位尺度において晴眼者より有意に低い得点であったこと，「身体機能」「身体役割制限」「精神役割制限」さらに「社会的機能」の下位尺度において，視力障害が重度の群が軽度の群よりも低い得点を示したことなどから，視覚障害者の健康関連QOLを測定するのに適していると判断した。

【研究3　視覚障害者の心理的適応モデルおよび心理的適応と社会統合との関連モデルの構築】

NAS-Jの7下位尺度得点を用いて共分散構造分析を行った結果，もっとも適合度が高かった

モデルでは，「ローカスオブコントロール」や「自己効力感」の潜在因子である「行動主体としての自己」，すなわち将来の仕事に対するコントロール可能感や成功可能感の概念が，「自尊感情」や「不安・うつ」の潜在変数である「内的自己価値」に影響を与え，さらに，「受容」と「態度」の潜在変数である「障害の認容」に影響を与えるという3次元構造を示した。このモデルにおいて，障害を得てからの時間的経過は独立して「障害の認容」に影響を与えており，一方で「行動主体としての自己」→「内的自己価値」→「障害の認容」の道筋は時間の経過から独立し，かつ経過年数よりも強い因果を持っていた。つまり，時間とともに自然と段階を経ていくのではなく，時期が来るのを待つよりも自分の状況について何らかの行動をし，コントロール可能感や自己価値を高めることで個人の心理的適応が高められることが示唆された。このことは，リハビリテーションによる成功体験を強化するような介入が心理的適応を高める可能性を示唆した。

続いて，機能障害－能力低下－社会的不利の階層性を持つ障害モデルにおいて，心理的適応は社会的不利に影響を与えるであろうという仮説に従い，共分散構造分析を行った。心理的適応構造モデルに使用した変数に加えて，SF-36で測定した「身体役割制限」「精神役割制限」「社会的機能」の3変数と関連する潜在変数「社会統合」と能力低下に該当する変数「視力」，時間的経過を表す変数「経過年数」を分析に使用した。もっとも適合度が高かったモデルは，心理的適応の3次元のうち「内的自己価値」が「社会統合」に大きな影響を与えており，その影響は「視力」からの影響よりも強かった。このことにより，不安・うつが解消され自尊感情が高まることで社会統合が促進される可能性が示され，社会統合の促進に心理的適応の果たす役割が大きいことが明らかになった。一方，「障害の認容」は「社会統合」との関連を示さず，「社会統合」には価値観の変化を伴う「障害の認容」が必須ではないことが示された。しかし，本研究の対象は訓練中の視覚障害者であり，訓練中でない視覚障害者に同じ構造が見られるかを検討する必要がある。また，今後は，障害モデルに則って「機能障害」「能力低下」「社会的不利」を含み，さらにソーシャルサポートや社会資源の利用等の社会的環境要因を含めたモデルに発展させていくことが必要である。

審査結果の要旨

本研究は，障害への適応に関する心理的変数が障害受容とどのように関連するのかを探り，日本における視覚障害者の心理的適応の構造モデルを構築するとともに，心理的適応が社会への再統合に与える影響を検討したものである。

研究1においては，視覚障害者の心理的適応を測定するNottingham Adjustment Scaleの日本語版（NAS-J）が作成され，晴眼者を対象にした予備調査によってNAS-Jの信頼性・妥当性が検討された。因子分析による構成概念妥当性の検討，内的整合性の検討，健康関連QOL指標であるSF-36との外的基準妥当性の検討を経て，NAS-Jが心理的変数を測定するための適切な尺度であることが示された。

研究2においては，視覚障害者リハビリテーション関連施設に入所する職業訓練者を対象に，NAS-Jと健康関連QOL尺度SF-36の妥当性・信頼性が検討された。因子分析による構成概念妥当性の検討，内的整合性の検討，視覚障害者と晴眼者との得点比較，各項目間の相関分析を経て，NAS-Jは視覚障害者の心理的適応を測定するのに適していることが示された。SF-36は，視覚障害者と晴眼者との得点比較，視力障害の重度群と軽度群との得点比較などから，視覚障害者の健康関連QOLを測定するのに適していることが示された。

研究3では，まず共分散構造分析によって，障害への適応に関する心理的変数の因果関係モデルが検討された。このモデルにより，将来の仕事に対するコントロール可能感や成功可能感を表す「行動主体としての自己」が「内的自己価値」に影響を与え，さらに「障害の認容」に影響を与えるという3次元構造が示された。また，障害を得てからの時間的経過が「障害の認容」に与える影響よりも，「行動主体としての自己」→「内的自己価値」→「障害の認容」という道筋が強い因果を持つことが示され，自分の状況について何らかの行動をしコントロール可能感や自己価値を高めることで個人の心理的適応が高められることが示唆された。

続いて，心理的適応の構造モデルと，SF-36で測定した「身体役割制限」「精神役割制限」「社会的機能」の3変数と関連する潜在変数「社会統合」，「視力」，「経過年数」の関連が検討され，「内的自己価値」が「社会統合」に与える影響が大きいことが示された。このことにより，社会統合の促進に心理的適応の果たす役割が大きいこと，また，「社会統合」には価値観の変化を伴う「障害の認容」が必須ではないことが明らかにされた。しかし，今回の対象者は職業訓練中の視覚障害者に限られ，対象を拡大してさらに検討することが必要と考えられた。

以上，本論文は，視覚障害への心理的適応を測定する尺度NAS-Jを作成し，職業訓練中の視覚障害者における障害への心理的適応の構造を示すと共に，心理的適応と社会的統合との関連を明らかにした。これまでほとんど検討されてこなかったリハビリテーションにおける心理的適応の役割の解明に重要な貢献をなすと考えられ，学位の授与に値するものと考えられる。